

# 「内部質保証の有効性を高める自己点検・評価報告書」 にするための課題抽出<sup>†</sup>

Identifying issues for creating "internal evaluation/reports  
that enhance the effectiveness of quality assurance"

和田由里恵<sup>\*1</sup>

Yurie WADA

熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻<sup>\*1</sup>

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

(あらまし) 内部質保証において、重要な役割を担う自己点検・評価が十分に機能しているとは言い難いのが現状である。そこで、この要因を明らかにするために内部質保証委員会の担当者へのインタビューを行った。その結果、①自己点検・評価報告書作成者の経験にばらつきがある。②内部質保証についての知識にばらつきがある。③IRデータの活用度が低い。④認証評価機関発行のハンドブックの活用度が低い、の4点が課題として抽出された。

キーワード：内部質保証, 自己点検・評価, インストラクショナルデザイン, FD, SD

## 1. はじめに

近年、高等教育における環境は、グローバル化、多様化が進み、大学教育における質保証の転換期を迎えている。国際化が進む高等教育において、各国ではアウトカム重視の大学改革が行われている(深堀 2015)。

日本の高等教育においてもアウトカムが重視されることは明らかである。つまり、これから求められる質保証では、大学自らが自発的に評価改善を行う仕組みの構築である。

内部質保証において、自己点検・評価が重要な役割を担っているが、これらが十分に機能しているとは言い難いのが現状である。

自己点検・評価が有機的に機能していない要因として、林(2018)では、「内部質保証とはなにか、それを実現するシステムの要素が明確ではない。」と述べている。

また、安岡(2015)では、大学の質保証において、PDCAを稼働させるためには、具現的な教育目標が必要である。つまり教育目標が、客観的な指標によって測定できるものであることと、目標達成のために学内の共通理解が必須であると述べている。

## 2. 研究の目的

先述したように内部質保証の基礎となる自己点検・評価報告の実施はされているものの現時点ではこれらが有機的に機能しているとは言い難い(工藤 2017)。

そこで、本研究では、作成した自己点検・評価報告書が有機的に機能しない要因を明らかにすることを目的とする。

## 3. 方法

自己点検・評価報告書作成における課題抽出のため、内部質保証委員会の担当者へのインタビュー調査を行った。

インタビューは、zoomを使用して行った。対象者は、内部質保証に関して、間接的担当5年直接的担当5年の計10年にわたって携わっている。さらに現在は、IRも担当しているSME(Subject Matter Expert)である。

インタビューは、半構造化インタビューを行った。

その結果について、自己点検・評価作成者の経験と意識・態度に分け、まとめたものを表1に示す。

表1 インタビュー結果

項目	特徴
自己点検・評価報告書作成者の経験	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 自己点検・評価について、作成文書を初めて見る担当者もいれば、1～2度経験している担当者もいる。</li> <li>➤ 認証評価機関である「公益財団法人大学基準協会」にて大学評価委員として経験しており、点検・評価報告書の作成に協力的な学部も一部ある。</li> </ul>
自己点検・評価報告書作成への意識・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 点検・評価を行うことで改善活動へ繋げるという意識がない。</li> <li>➤ とりあえず、項目を埋めて出せば、あとはIR (Institutional Research) 組織がなんとかしてくれると考えている。</li> <li>➤ 活動を行った場合の活動を示す根拠資料がない。</li> <li>➤ 学部長、研究科長が書類作成を行い、授業科目、教員レベルでの点検・評価は行われず、実質的な自己点検・評価は行われていない。</li> <li>➤ 運営において改善の必要がないと考えている。</li> </ul>

#### 4. 結果と考察

半構造化インタビューから、自己点検・評価報告書作成者の経験にばらつきがあること、内部質保証に対する知識にもばらつきが見られることが明らかになった。

また、認証評価機関作成のハンドブックや学生データが蓄積されているIR組織のデータの活用度が低いことも明らかになった。

これらの結果をもとに、自己点検・評価報告書作成者の経験や知識が少ない場合でも、負担が少なく、さらに内部質保証の有効性を高める自己点検・評価報告書を作成するための支援ツールの開発が必要であると考えられる。

#### 5. 今後の予定

今後、本研究をもとに自己点検・評価報告書作成者のための支援ツールとしてチェックリストとハンドブックを作成する。

チェックリストは、作成者が現在の内部質保証に関する知識について現状を把握するため

に、内部質保証について何を知っているかわからないのかをチェックできるものを作成し、明確ではない知識については、ハンドブックですぐに確認できるようにする。

このチェックリスト、ハンドブックはIDの基本である入り口と出口の設定、評価基準という考え方（鈴木 2006, 2013）を基に作成する。チェックリスト、ハンドブックを使って自己点検・評価報告書を作成することで、①所属組織の自己点検・評価のために不足している項目、②必要な評価基準等に気づき、③改善（PDCA）をはかることが可能となる。これらの改善により内部質保証の有効性を高める自己点検・評価報告書の作成が可能となると考える。

#### 参考文献

- 工藤潤（2017）第3期認証評価における大学評価について—大学基準協会が目指す内部質保証—。大学時報，372：98-105
- 公益財団法人大学基準協会（2020）大学評価ハンドブック（2020（令和2）年改定）  
<https://www.juaa.or.jp/accreditation/institution/handbook/>
- 鈴木克明（2006）IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図：eラーニングの質保証レイヤーモデルの提案。日本教育工学会第22回全国大会講演論文集，337-338
- 鈴木克明（2013）教材設計マニュアル—独学を支援するために—。北大路書房，京都
- 鈴木克明，市川尚，根本淳子（2016）インストラクショナルデザインの道具箱101。北大路書房，京都
- 林隆之（2018）内部質保証システムの概念と要素先行研究レビューと「教育の内部質保証に関するガイドライン」の定位。大学評価・学位研究，19：3-22
- 深堀聰子（2015）アウトカムに基づく大学教育の質保証—チューニングとアセスメントにみる世界の動向—。東信堂，東京
- 安岡高志（2015）立命館大学の自己点検・評価（PDCAサイクル）が緒につくまで。立命館高等教育研究，15：17-36